（管理規則第３条実施要領　別紙様式）

２０２５　年度（令和７年度）学校評価自己評価表

福山市立中央中学校区	校番５３	福山市立西深津小学校

最終更新日	2025 年（令和７年）1月23日

Ⅰ　福山市

ミッション　　福山に愛着と誇りをもち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン　　各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ　中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容

- 中学校の不登校生徒が増加している傾向にある。校区としての取組を進めてほしい。
- 小中学校の授業参観から子ども主体の学びを育む様子が感じられた。引き続き、子どもたちの主体性を育む取組を進めてほしい。
- 評価項目の８項目において、十分満足、概ね満足できるという肯定的評価をいただいており、引き続き努力してほしい。

児童生徒の現状

●各学校において、子どもの主体の学びづくりの中で主体性が育ちつつある。
○小中で授業研究をすすめ、自分の考えをもち深め、対話する力を付けてきている。
●全国学力調査の結果から特に中学校における数学、国語の力を伸ばす必要がある。
●不登校傾向にある児童生徒数の出現率が中学校で高い。

育成する資質・能力	スキル・・・　Ａ【学びに向かう力】　Ｂ【課題発見・解決力】 倫理観・・・　Ｃ【自己肯定感】
めざす子ども像(義務教育修了時の姿)	ふるさとを愛し、地域の中で、伸びやかにたくましく成長する子
中学校区として統一した取組等	１　校区合同で実施する授業研究 ２　中学校生徒会による「学校紹介」の実施 ３　校区校長会、校区教頭会、校区各主任会等を通しての連携

Ⅲ　自　校

ミッション

高い志を持ち、たくましく生きる子どもの育成

学校教育目標

「学ぶ楽しさ、生きる喜び」を持つ子どもの育成

現　状

＜児童生徒＞
○児童が日常の生活の中で主体性を発揮し、自ら計画・実行しようとする気持ちが高まってきている。
○地域を題材にした活動に積極的に取り組み、地域に愛着を感じている。
●自分や周りの人の良さを認め合ってきているが、さらに自己肯定感を高める取組。
●不登校気味な児童が多くなっていること。
＜授業＞
○学びに向かう意欲をもち、楽しみながら学習活動に取り組んでいる。
○算数科や国語科で、基礎学力の向上が見られる。
●自分の考えや思いを自分の言葉で表現し、対話により学習を深めること。
●知識・技能を生きて働く知識・技能に高め、思考力・表現力・判断力の向上につなげていくこと。

育成する資質・能力		スキル・・・　Ａ【学びに向かう力】　Ｂ【課題発見・解決力】 倫理観・・・　Ｃ【自己肯定感】
めざす子ども像	低	Ａ　「学ぶこと」のおもしろさを感じ、学んだことを身の回りの生活とつなげて考えたり、生活の中に取り入れたりしようとすることができる。 Ｂ　身の回りの事象から興味・関心・疑問をもとに課題を見付け、学んだことや経験をもとに課題を解決しようとすることができる。 Ｃ　身の回りの他者や環境との関わりの中で、自分の良さを見付けたり、自分は大切な存在であることを感じたりすることができる。
	中	Ａ　「学ぶこと」のおもしろさに気付き、学んだことや体験したことを生活に活かそうとすることができる。 Ｂ　自分なりの課題を設定し、見通しをもって方法を選択し、他者と考えを交流しながら、解決しようとすることができる。 Ｃ　他者や周りの環境との関わりの中で、自分自身をみつめ、自分の良さや特徴を受け入れることができる。
	高	Ａ　「学ぶこと」のおもしろさを認識し、学んだことや考えたことを生活や学習に活用しようとすることができる。 Ｂ　自ら課題を設定し、手段や情報を自分で選択し、多様な他者と協働的に活動しながら課題解決に向かい、新たな課題をみつけることができる。 Ｃ　自分自身を理解し、自分の目標や夢に向かって挑戦し、自尊感情を高めることができる。

研究	テーマ	主体的・対話的で深い学びの創造
	内容等	○知識・技能を活用し、「なぜ？」と思考させる授業力を高める。 ○効果的な問い返しにより、使える知識・技能を習得させる授業力を高める。
めざす授業の姿		○児童が「分かった」「できた」と語りたくなる知識・技能を身に付ける授業 ○児童が身に付けた知識・技能を「使いたい」と活用して思考・判断する授業 ○児童同士が学びや考えを互いにつなげ、学びを深める授業

Ⅳ　目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立西深津学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日） □指標に係る取組状況	プロセス評価	達成評価	改善方策	最終評価（2月末） □指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	プロセス評価	達成評価	総合評価	改善方策
8	児童の主体的・対話的で深い学びを全教室で展開	★	継続	生きて使える知識・技能の力の獲得をもとに、思考力・表現力・判断力を高める。	・児童の実態を把握して単元、授業構想を行う。 ・「なぜ?」を生む導入の工夫を行う。	・単元末テスト（算数科） 知識・技能B以上を75%以上 思考・判断B以上を65%以上 ・各学年、年1回以上単元構想を行う。	・単元末テスト（算数科）知識・技能 B 以上は76%、思考・判断・表現B以上は54%であった。 ・夏季研修で全学年児童の実態を把握して、単元構想を行い、導入や展開の工夫を考えた。２学期以降実施していく。	3	2	・チャレンジタイムで基礎的・基本的な計算能力、書く力、認知能力を高める課題を曜日に応じて設定し、取り組む。 ・教材研究タイムを週１回設定し、教材研究及び授業のフィードバックを行い、日々授業改善を図っていく。	・チャレンジタイムで基礎的、基本的な力を高めるドリルを行ったことで単元末テスト（算数科）知識・技能B以上を 83%に向上させることができた。しかし、思考・判断・表現B 以上は 59%に留まった。 ・教材研究タイムを活用して全学年「なぜ?」を生むための単元構想を行い、授業展開を練ることができた。	3	3	3	・チャレンジタイムの継続した実施を行い基礎的、基本的な力を高めていく。 ・教材研究タイムで思考力を高めるための活用問題の準備を行い、毎単元どこかに位置付け実施していく。
5	安心して、自己の可能性を発揮できる環境づくり	★	継続	自己の可能性を発揮することを通して自己肯定感を高め、不登校を減少させる。	・子どもが活躍できる場づくりを行い、子ども同士の認め合いや、教師からの肯定的評価を積極的に行う。 ・不登校傾向にある子どもが、その子に合った登校の仕方で登校できるように、保護者とも連携を図りながら取り組む。	・児童アンケート 「自分にはよいところがある」肯定的評価を75%以上 ・その子どもにおける欠席日数を、昨年度より減らす。	・「自分にはよいところがある」の肯定的評価が70%であった。全校的な場として、縦割り掃除での頑張りを評価し合うことができた。また、クラスにおいても、「今日のキラリ」など、いいとこ見つけを習慣化している。 ・不登校傾向にある児童へは、保護者と定期的に連携を取って取り組んでいるが、昨年度のこの時期と比較して、欠席日数は増えている。	3	2	・「授業での小さな伸びをタイムリーに評価する。」「友達のいいところを見つけてそれをカードにして渡す。」「こども自身が意識していないよさを認識させる。」などの取組を進めていく。 ・引き続き、その子に合った登校の仕方を保護者と連携しながら探っていく。	・肯定的評価が73%であった。アンケートの記述によると、自分の具体的なよさが分かっている児童が多い。また、低学年では教職員や保護者からの評価が嬉しいととらえ、高学年では友達からの評価が嬉しいと捉えている。 ・不登校傾向の児童の欠席日数は、昨年度より増加している。一方で、本年度新規に欠席日数が３０日を超える児童はいない。	3	3	3	・日々の教育活動の中で、小さな成功体験を積み重ねることで、自分はできる、自分には価値があるという感覚を育む。 ・不登校傾向の児童については、リモートでの授業参加を呼びかける。
				地域の一員として自覚をもち、地域に対する愛着や感謝の気持ちを高める。	・生活科、総合的な学習の時間を中心とした教科や行事の中で、地域の人や物などの資源を活用した活動を行う。	・児童アンケート 「自分たちの住んでいる西深津が好き」肯定的評価を85%以上	・肯定的評価が85%であった。年間の中で地域の人や物などを活用した活動を計画し、取組を進めてきた。昨年度までの積み重ねもあり、肯定的評価に表れていると考える。	3	3	・後期以降も、計画されている活動を、子どもたちに目的意識や相手意識をもたせながら進めていく。	・肯定的評価が84%であった。アンケートの記述によると、好きな理由として、楽しいし静かで過ごしやすい、公園やお店が多い、地域の人が優しい、土曜クラブ等のイベントが楽しみという内容が見られた。	3	3	3	・３学期に実施予定の地域行事に取り組むことで、地域の人、もの、ことへの愛着をさらに高める。また、次学年での主な地域に関する活動を紹介し意識付けをしておく。
3	教職員がやりがいをもち、良さを発揮できる取組の推進		継続	教職員が、個性を発揮し、積極的に教育活動に取り組み、やりがいを高める。	・情報共有の場としての職員室の場づくりを行う。 ・同学年だけでなく、しっかりと異学年の教職員同士の対話を行う。	・教職員アンケート 「日々の授業や子どもの姿について、立場や役割を越えて対話している」90%以上	・教職員アンケート（1 回目）において 86.7%であった。週１回の教材研究の時間を設けることでも、同学年・異学年間での対話が広がっている。	3	3	・引き続き、教材研究の時間を定期的に設け、日々の成果や悩みをも情報共有できる場としての職員室の環境づくりを行っていく。	・教職員アンケート（1月末）において100%であった。学年を超えて、違う立場から気付いた良さや気になる様子や改善に向けた方向性を共有・相談することができた。	3	4	4	・教材研究の時間を定期的に設けることで、情報共有の場となった。来年度は、教材研究タイムだけでなく、日頃の悩みの相談タイムを設けていくなど、引き続き教職員同士が対話しやすい環境づくりを行っていく。

［プロセス評価の評価基準］

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

［達成評価の評価基準］

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し，十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し，望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し，一定の成果をあげた。
2	目標を下回り，成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り，成果が認められなかった。

［総合評価の評価基準］

評点	評価基準	
5	１００％以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	８０％以上１００％未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	６０％以上８０％未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	４０％以上６０％未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	４０％未満の達成度	目標を達成できなかった。